

# 劇あそびに対する保育者の意識と 集団保育における劇あそびの現状

～東京都23区の公立幼稚園・保育所に対するアンケート調査を通して～

The Concept of Nursery Teachers and Kindergarten Teachers for Drama Activities and the Present  
Situation of Drama Activities at Daycare Centers and kindergartens  
～ Via a Questionnaire Survey into Public Kindergartens and Nurseries in the 23 Wards of Tokyo ～

中山 佳寿子  
Kazuko NAKAYAMA

# 劇あそびに対する保育者の意識と 集団保育における劇あそびの現状

～東京都23区の公立幼稚園・保育所に対するアンケート調査を通して～

The Concept of Nursery Teachers and Kindergarten Teachers for Drama Activities and the Present  
Situation of Drama Activities at Daycare Centers and kindergartens  
～ Via a Questionnaire Survey into Public Kindergartens and Nurseries in the 23 Wards of Tokyo ～

中山 佳寿子\*

Kazuko NAKAYAMA

**Abstract** This paper examines whether drama activities in daycare centers and kindergartens foster creativity via the analysis of questionnaires responded to by teachers in public day care centers and public kindergartens in Tokyo's 23 wards. As a result of the questionnaire, it turned out that drama activities were carried out with contents centered on practice for a limited period of one year. The reason for this is that play activities had been carried out for performances at recitals. In addition, in the daily program, drama activities that do not target presentations have rarely been carried out. Even when practicing for recitals, it is important to provide children with opportunities and periods to freely make ideas. However, most nursery schools do not prepare for this very well. Currently, it is said that the freedom to chase games during play periods is decreasing. Throughout the year, nursery teachers should consider allowing dramatic plays that are not the subject of presentations to be carried out during main activities as part of the daily program.

**Key words:** Drama ドラマ, Dramatic Play 劇あそび, Performance 発表会, Creativity 創造性

## 1. 研究の動機と目的

保育における劇あそびの大きな目的の一つは、保育所保育指針<sup>1)</sup>や幼稚園教育要領<sup>2)</sup>の領域「表現」に示されるように、「創造性」を育むことである。

創造性については多くの先人が定義を行なっているが、本論では、創造性を、前田(1968)の「独自のものをつくりだす能力あるいは新たなものを生み出すはたらき」<sup>3)</sup>に加えて、マズロー(Maslow, A.H.)の「自己実現の創造性」即ち、「その人にとっての新しい価値の創造」<sup>4)</sup>という意味で捉えることとする。

「新たなものを生み出す」という視点から劇あそびのあり方を捉えると、発表に重きを置く内容より

も、即興的な表現を積み重ねるドラマのような「過程中心の活動」<sup>5)</sup>のほうが、より適した内容と考えられる。作りだす過程そのものに価値を置いた活動では、「見せる」「発表する」ことを主目的としないため、子どもは安心して即興的な表現を行なうことができる。その結果として創造性がより引き出されやすいと考えられる。

上記のような作り出す過程そのものに価値を置いた劇あそびは、集団保育において、どのように行なわれているだろうか。現在、集団保育で行なわれている劇あそびには、発表会を目指した活動と、発表を前提としないごっこあそび及び即興的な表現を主とした、いわばドラマ的な活動の二つがあると考えられる。前者の発表会を着地点とした劇あそびは、上演の日程が近づくにつれ、劇「あそび」の段階から「練習」に変化してしまう危険性を孕んでいる。「あ

\* 草苑保育専門学校  
Soen Professional school of early childhood education

そび」という過程中心の活動では「新たなもの」は次々と生まれ得るが、それが発表会即ち本番を目指した「練習」に変化した途端、同じことの繰り返しになり、創造性は発揮されにくくなる。

劇あそびが子どもの創造性の伸長に寄与するものとなるためには、「練習」よりも「あそび」の段階の機会及び期間を十分にとることが重要である。しかし、筆者自身の保育所勤務経験から、現実には「練習」の比重が高くなっている傾向があると気付いた。

以上の問題意識から、集団保育の場における劇あそびが実際どのように行なわれているのか、「劇の発表会」と「通常保育における劇あそび」を中心に、アンケート調査を行なうことにした。その調査を通して、集団保育における劇あそびの現状と劇あそびに対する保育者の意識を浮彫りにし、今後の課題について考察することを目的とする。

## 2. アンケート調査の概要

東京都23区の公立保育所・幼稚園の5歳児クラス担任に対するアンケート調査を行ない、分析を行なう。23区の各区役所のホームページから住所が検索できた公立保育所・公立幼稚園・公立こども園合計703園から、地域が分散するよう確認しながら400園を選び、5歳児クラスの担任宛にアンケート用紙を送付した。調査実施時期は平成28年3月～4月、回収実数は121通（幼稚園54園、保育所59園、こども園8園）、回収率は30.3%だった。質問では、子どもたちの観劇頻度、発表会の有無、時期、導入期間の長さ、発表会のねらいや目的、影響、発表会を目的しない劇あそびの有無及び頻度、などについて尋ねた。回答者の年代は、幼稚園教諭は20代が一番多く（40.7%）、保育士は50代が一番多かった（45.8%）。保育歴は、回答者の年代に正比例していた。

## 3. 結果と考察

### 3-1. 発表会について

本論では、アンケート調査の項目の中から、特に「発表会」と「通常保育における劇あそび」を中心に述べる。

#### 3-1-1. 劇の発表会の有無

回答のあった保育所・幼稚園・こども園の100%

において、子どもたちの出演する劇の発表会が行なわれていることが分かった。これは北村（2001）が長野県の保育所・幼稚園に行った調査の「9割<sup>6)</sup>」より高い割合である。その要因としては、①本研究の調査対象がすべて公立園であり、保育内容がある程度均質であると考えられること、②本研究の調査対象が東京都の中でも23区という都市部で行われたこと、などが考えられる。北村の保育所の集計データには、50人以下の小規模園が相当数（保育所全体の28%）含まれている。一般的に小規模園の場合、同じ年齢の子どもが多く揃わないために、発表会という形で劇あそびの発表を行わない場合もあることも、要因として考えておかねばならない。

#### 3-1-2. 劇の発表会の頻度・時期

劇の発表会の頻度は、保育所、幼稚園、こども園に共通して「1年に1回」が96.0%と圧倒的に多かった。開催時期は、12月（55.4%）、2月（29.8%）と、年度の後半に集中している。要因としては、3-1-8に述べるように保育者の多くが、発表会のねらいを「一年の総まとめ」や、「これまでの生活の集大成」などと位置付けているからであることが考えられる。

#### 3-1-3. 劇の発表会の観客

劇の発表会で誰が観客になるかを質問（複数回答可）した。「保護者・園児が観客になる」が70.2%と多かった。しかし、「園児のみが観客になる」も12.4%あった。これは保育所と幼稚園ではほぼ同率である。

筆者のアンケート調査では、「保護者に見せる発表会」を行わないことに対して理由を問う項目を設けなかったため、北村の調査を参考にする。

北村の調査では、保護者向けの発表会を行わず、子どものみの「見せ合い会」のみを行なっている幼稚園・保育所から、保護者に「見せるものにする」と子供に無理をさせ保育が偏る」など「見せることの弊害」についての意見が多く寄せられていることが明らかになっている。ただし、同調査・同質問において、保育所からの回答の中で「見せることの弊害」と同じくらい多くあげられている理由が、保護者が仕事を休めないことへの配慮であった<sup>7)</sup>。また、北村によれば、現場に立っている保育者のほうが、園長などの管理職よりも、発表会を「保護者に見せるためのもの」と意識し、加えて「見せることの弊害」も感じている率が高い<sup>8)</sup>。筆者のアンケート調査に

おいても、「劇の発表会のデメリット」を感じている保育者は保育所で4割、幼稚園でも2割弱と、決して少なくない数で存在しており、北村の調査結果と共通している。

### 3-1-4. 導入の期間

発表会の作品の練習に取り掛かる前に、作品を決めるまでの期間、劇あそびへの興味を高めたり、作品のテーマを探したりする活動を行なっている園もある。このような時期を、今回のアンケート上においては「導入期間」と名付けた上で、期間の長さや内容について質問を行なった。導入においては、作品の上演にとらわれず自由に劇あそびを行なうため、子どもが自分でストーリーを決めたり、お互いの表現を友だちと見合う機会が豊富である。このことから、導入期間は、創造性の伸長に寄与する重要な期間であると考えられる。

導入の期間について質問し、回答を集計し構成比を円グラフで表したものがFig. 1である。

Fig. 1にみるように、幼稚園では1ヶ月未満と1ヶ月程度が多くなっている。保育所では、2ヶ月や3か月、それ以上の園が13園（回答した保育所の20.4%）あった。

幼稚園の導入期間が保育所に比べて短い要因としては二つ考えられる。

一つは幼稚園が通常の保育で劇あそびにつながると思われる領域「表現」の活動を、保育所よりも高い割合で行なっている（Fig. 2）という点である。

幼稚園では劇あそびそのものではないが、通常保育で領域「表現」の活動を様々なジャンルで行なっているという意識があるため、その分、導入期間を長くとっていないという可能性がある。

もう一つの要因として、両施設の保育時間の違いがあげられる。公立幼稚園と公立保育園の年間行事の数は、それぞれの区のHPなどで見る限り、ほ

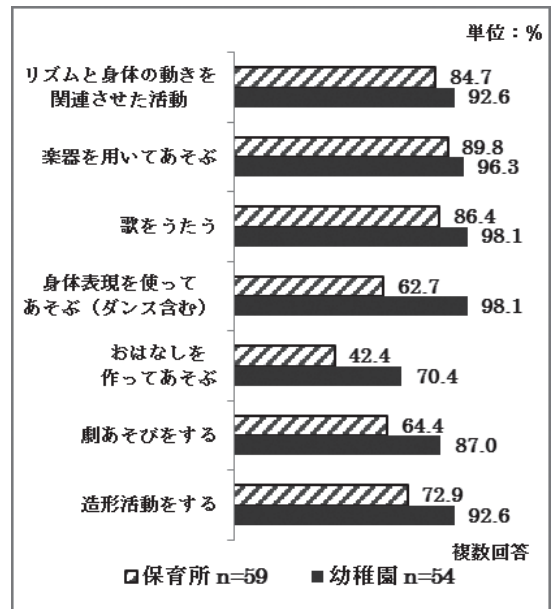


Fig. 2 Activities for expression activities

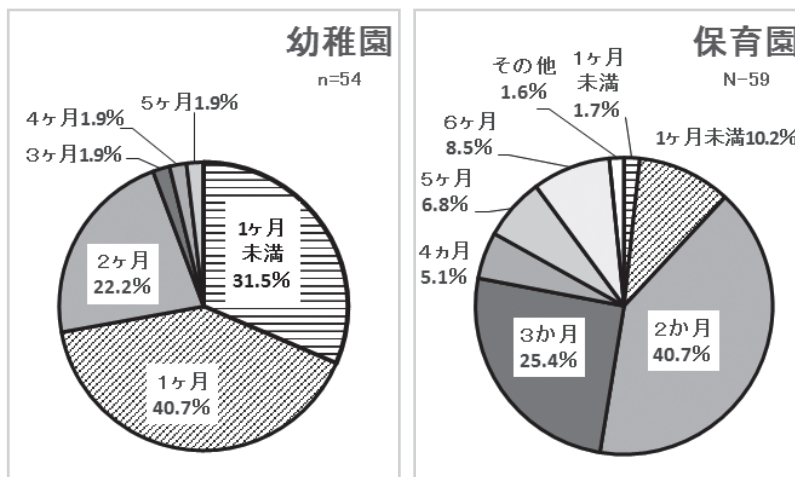


Fig. 1 Periods for introducing drama activities

は同じである。しかし、子どもの保育時間は、保育所が8時間程度、幼稚園が4時間程度である。同じ数の行事の準備を半分の保育時間で行なっているため、発表会の導入に使える時間も、保育園より少なくなっている可能性がある。

### 3-1-5. どのように劇あそびの導入を行うか

Fig. 3は「導入をどのように行なうか」を質問し（複数回答）、回答割合を棒グラフで表したものである。多かったのは、「絵本・紙芝居などで興味をひく」が全体の89.3%、「日々の生活の中から題材を拾う」が99件で全体の81.3%であった。「保育雑誌を参考にする」としたものは少ないことから、オリジナル志向が強いことが伺える。「その他」については、「職員の行う素話」や「職員劇」、「絵本などをもとにしたパネルシアター」など、職員が上演する作品を子どもが鑑賞し、導入に用いるという記述が2件あった。

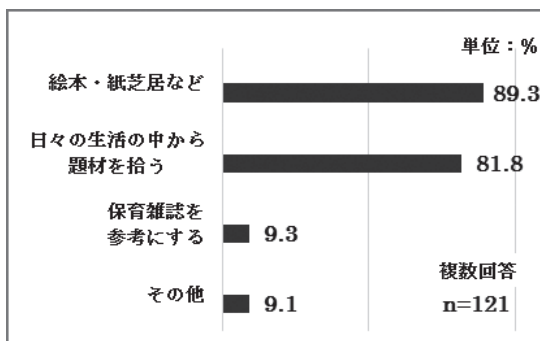


Fig. 3 Modes for introducing drama activities (multiple answers allowed)

### 3-1-6. 劇上演のために具体的な準備をする期間

上演作品のテーマの決定した後の創作過程（小道具・役決め・脚本作り、練習などを行う）を「具体的な準備をする期間」と定義してから質問を行なった。「具体的な準備をする期間」は①ストーリーや配役を決める ②練習 と二つの段階があると考えられるが、創造性に特に大きく影響すると思われるのは①のストーリーを決める段階である。従って劇あそび本来の目的により近いのは①の段階における活動である。

Fig. 4は上演作品が実際に決まってから、具体的な準備（小道具・役決め・脚本作り、練習）を行なう期

間についての回答を集計したものである。保育所で最も多いのは「2ヶ月」で24件、幼稚園は「1ヶ月」で29件である。幼稚園の「1ヶ月未満」20件と「1ヶ月」29件を合計すると幼稚園全体の90.7%にあたる。

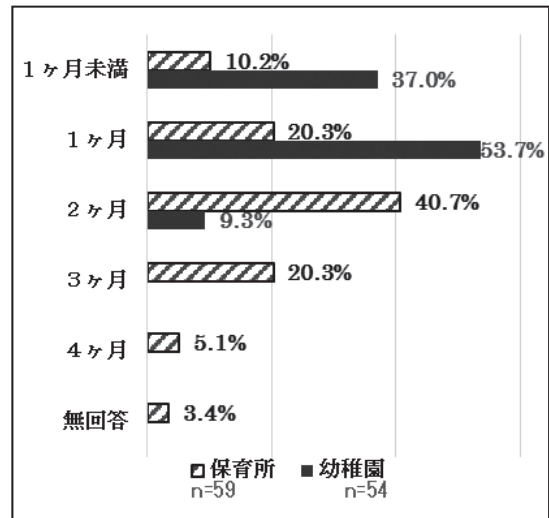


Fig. 4 Periods for the development of concrete plans

先述のとおり、具体的な準備をする期間は①と②の段階を合わせたものであるが、「1ヶ月未満」「1ヶ月」の回答園では、①のための時間が十分に取れずに②の練習へ移行している可能性も否定できない。

上記の園では、練習が最低2週間はかかるかと仮定すると、①のために費やされる期間は1週間～2週間である。上記のことから、発表会の「具体的な準備を行なう期間」に関しては、多くの園で、劇あそび本来の目的により近い①の活動と同じ程度か、それ以上に②の「練習」の活動を重視していると言えるのではないか。

### 3-1-7. 作品をどのように決めるか

発表会で上演する作品をどのように決めるか (Fig. 5) を質問した。保育所では「先生が与えた選択肢から子どもたちが選ぶ」が最も多く、「子どもたちが話し合いで決める」は二番目に多かった。幼稚園では反対に、「子どもたちが話し合いで決める」が最も多く、二番目に多かったのは「先生が与えた選択肢から子どもたちが選ぶ」だった。

「先生が与えた選択肢から子どもたちが選ぶ」も



「子どもたちが話し合いで決める」も子どもたちに主体性を引き出そうという保育者のねらいが感じられる。導入の方法（本論 3-1-5 参照）の結果などとも合わせると、それぞれの保育者が、発表会の作品に子どもたちが興味を持ち、主体性を持って取り組めるような工夫をしていることが分かる。

幼稚園では「子どもたちが話し合いで決める」園が多い。話し合いは導入期間に行なわれるが、3-1-6 で明らかにしたように、幼稚園の 6 割では導入の期間が 1 ヶ月未満から一か月と比較的短い。ひと月という短期間の中で、劇あそびに興味を持たせるための活動と作品を決めるための話し合いがどのように両立されているのか、今後さらに調査を重ねていく必要がある。

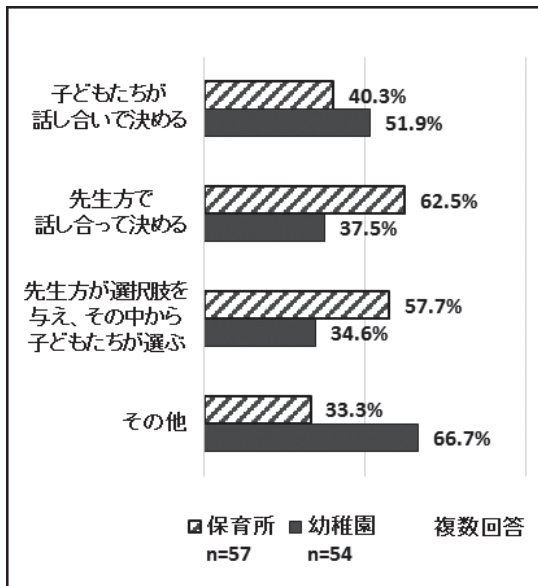


Fig. 5 Decision-making procedures for staged performances (multiple answers allowed)

「その他」の自由記述欄には、「劇・オペレッタ集から決める」「子どもたちの生活から創作していく」「教師と子どもと相談しながら決める」「教師が劇にしやすいお話の絵本をたくさん読み聞かせることで、幼児に印象づけ、幼児が自分たちで好きな作品を選べるようにしている」「いくつか劇遊びを楽しむ中で子どもたちの実態に合わせて教師が決める」「作る」「保育士が日ごろ読んでいる絵本で子どもが

興味を持っているものを題材としてアレンジする。活動の中で（運動会など）子どもたちが興味を持った題材に近い絵本を探し、アレンジする」などで、おおまかにまとめると「日常の保育とつなげる」「子どもの興味に合わせる」という内容が多かった。

### 3-1-8. 劇の発表会のねらいや目的

劇の発表会の「ねらいや目的」について質問し、回答のあった保育園の 86.4%、幼稚園では 81.5%、こども園の 62.5% から回答を得た。（自由記述）

劇の発表会のねらいや目的について、自由記述での回答の文章をすべて分節に区切り、登場する言葉を意味により以下の A ～ T に分類し、集計した。

Table 1 The phrases frequently used in the question regarding the purpose of drama presentations by children

種別	登場語句
A	「表現する楽しさ」or「作り上げる」「表現」「表現あそび」「劇あそび」
B	「身体表現」「動き」「体」
C	「工夫」
D	「創造性」「創造力」
E	「イメージをふくらませる」「イメージ」「お話（物語）を楽しむ」「想像する」「自分たちで考えたこと」「ストーリーを考える」
F	「一人一人」
G	「主体的」「自主性」「自分で」「自分たちで」
H	「観てもらう」「人の前」「人前」「観客」「発表する」「見せる」
I	「役になりきる」「役を楽しむ」「演じる」
J	「コミュニケーション」「伝える」「伝え合う」「思い（考え）を出し合う」「ふれあい」「話し合い」「意見を聞く」「相談する」「ぶつかりあい」
K	「友だちの良さを認める」「友だちの良さ気付く」
L	「友だち関係が深まる」「仲間がいる楽しさを味わう」「友だち（学級）とのつながり」
M	「協調性」
N	「協働」「協同」
O	「みんなで（皆で）」「全員が」「一緒に」「友だちと」「仲間と」「学級で」
P	「共通の」「同じ」「一つの」「共有する」
Q	「協力」「力を合わせて」「気持ちに合わせて」
R	「達成感」「充実感」「満足感」「やり遂げる」「成し遂げる」「成就感」
S	「自信」
T	「目標に向かう」「目的に向かう」

Fig. 6 は自由記述回答の中に A ～ T の語句が登場した割合をまとめた棒グラフである。

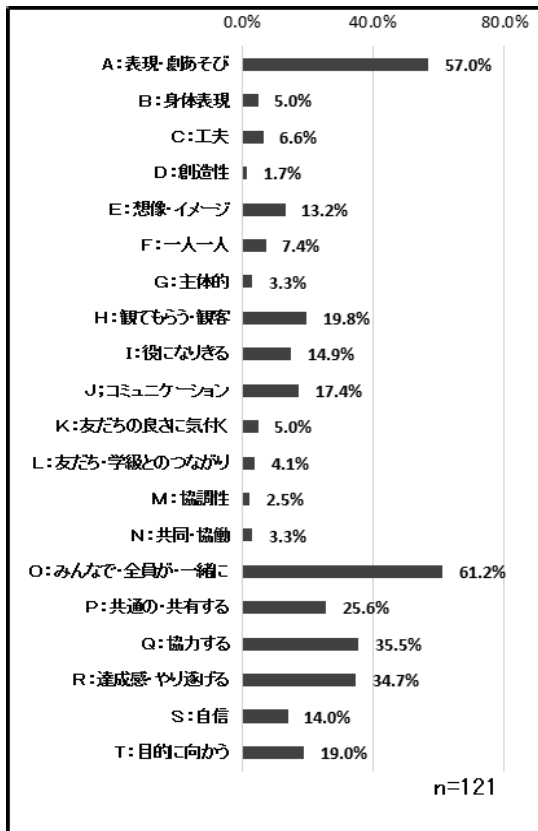


Fig. 6 Purpose of drama presentations by children

A ～ T をさらに、性質ごとに次の [1] ～ [7] のカテゴリに分類し、分析を行なった。

#### [1] 表現…A

「表現」という言葉が回答に登場した割合は、無回答も含めた全回答のうち、57%であった。この結果から、劇あそびは「表現活動である」あるいは「劇あそびは5領域の表現の中に位置付けられる」と意識している保育者が多いと考えられる。

#### [2] 創造性・想像力…B・C・D・E

表現を意識している保育者の割合が高いにも関わらず、表現のねらいとしてあげられている創造性を具体的に表すような語句は種類も登場割合もあまり

多くない。「工夫」「創造性」「体の動き」「お話を楽しむ」など創造性につながる言葉の登場割合はどれも15%未満となっている。

#### [3] 劇あそび…H・I

劇あそびという活動の特有の性質を表す「役になりきる」という言葉や、劇あそびに限らず「発表会」そのものの意義を表す「観てもらう」という言葉はいずれも創造性などよりは少し高い頻度で登場している。

#### [4] 自主性…F・G

創造性を支える一つの要素であると考えられる自主性を表す語句は種類も頻度も、少ない割合となっている。なお、「主体的」「自主的」のカテゴリには「自ら」「自分で」「自分から」などの言葉も含めている。

#### [5] 人間関係…J・K・L

5領域の中で「人間関係」に属するような言葉の中で、特に「コミュニケーション」や「みんなで」「一緒に」などは高い割合で登場している。

#### [6] 協力・協働…M・N・P・Q

「協力」などの集団の力を意味する語句の登場割合は協力が35.5%、「共通の」「一つの」「共有する」が25.6%と高い割合であった。

#### [7] 心情・意欲…R・S・T

[5] [6] に加えてもう一つ高かったのが、「心情」や「意欲」を表すような精神的な言葉で、「達成感」「充実感」が34.7%、「目標に向かう」が19.0%となっている。

上記 [1] ～ [7] から「劇の発表会のねらいや目的」の回答をおおまかにまとめると、以下のようになる。

「表現活動」であることは6割の保育者が意識しているが、創造性や自主性を目的にしている割合は1割程度である。一方、「コミュニケーション」「みんなで」「一緒に」など領域「人間関係」に関するものや「集団の力」を表す「協力」「力を合わせて」などの語句、「満足感」「目的に向かう」などの「心情・意欲」に関する語句は、高い割合で登場しており、いずれも創造性や自主性よりも、強く意識されていることが分かった。

#### 3-1-9. 上演について心がけていること

劇の発表会の上演に対して心がけていることを質問した（複数回答）。多い順に「演じている子どもたちが楽しめるものにする」「保護者が子どもの発

達を感じられるものにする」「子どもの発達に良い影響を与えるものにする」で、「完成度の高さ」が最も少なかった（Fig. 7）。この質問事項では、保育所と幼稚園に大きな傾向の違いは見られなかった。

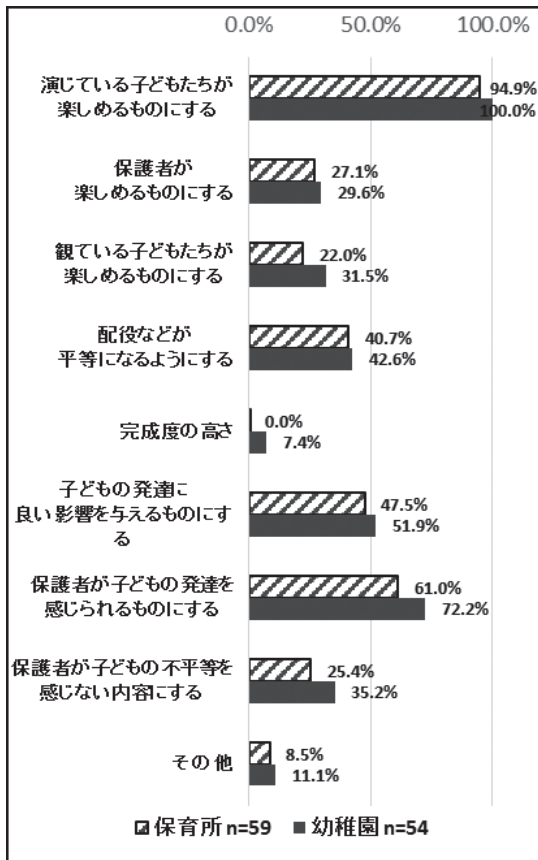


Fig. 7 Points of attention for drama presentations by children

また、「配役などが平等になるようにする」と「保護者が子どもの不平等を感じない内容にする」のいずれかまたは両方に「はい」と答えた保育士数は61名で、これは全回答者の50.4%を占める。ほぼ半数の保育者が「平等」「保護者の視線」を意識しながら、劇の発表会の上演を行なっていることが伺える。

### 3-1-10. 劇の発表会のデメリットを感じているか

「劇の発表会を行なうことに対してメリットの他

にデメリットも感じていますか？」という質問を行なったところ、Fig. 8のとおり保育所では「はい」が保育所全体の38.3%、幼稚園では18.5%と結果が大きく分かれた。

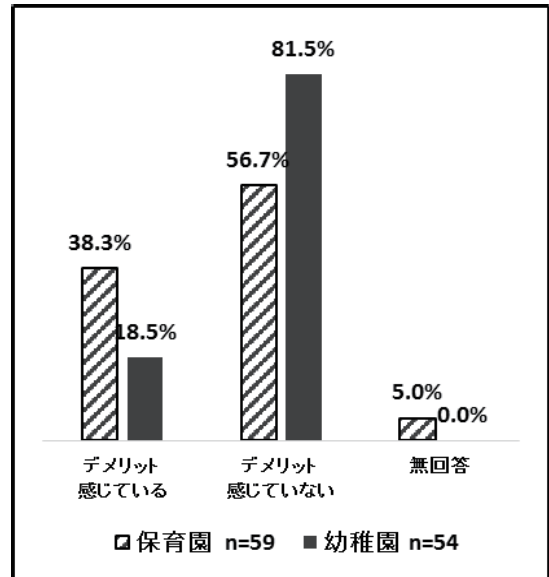


Fig. 8 Presence or absence of disadvantages regarding drama presentations by children

劇の発表会に対してデメリットを感じている保育者が、保育所では幼稚園の2倍以上も存在している点について注目したい。

この点は一見すると、本論「3-1-6 導入の期間」で述べた、保育所は幼稚園よりも導入の期間を長く取るなど、劇あそびに対して積極的な姿勢が見られるという事実と、矛盾しているように捉えられる。

しかし、感じているデメリットの内容についての回答（Fig. 9）をみると、この二つの事実は必ずしも矛盾していないということが理解できる。保育所では「練習に多くの時間を取られる」「練習が子どもにとって負担だ」「上演の準備作業が大変だ」「発表会よりも通常の保育を優先したい」などのデメリットは、劇あそびそのものに対するデメリットではなく、発表会の準備や練習に対してのものである。上記のことから、保育士は「あそび」としての劇あそびを重視しているが、その一方で、練習としての劇



あそびや発表会の準備については疑問を抱いているため、その結果として、導入期間は長いがデメリットを感じている割合は高いという傾向となっており、できていると考えられる。

また、本論の「アンケート調査の概要」で述べたように、幼稚園と保育所では回答者の年齢層及び保育歴が大きく異なる。これらの要因が回答者の保育観に影響を与え、ひいてはデメリットを感じるかどうかにも影響を及ぼしている可能性があることも、考慮に入れておく必要がある。

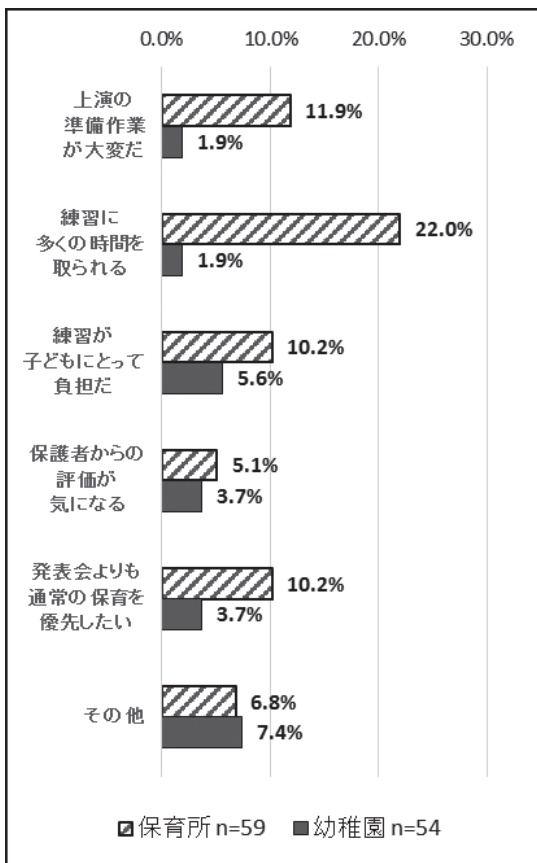


Fig. 9 Kind of disadvantages regarding drama presentations by children

「その他」の自由記述欄で半数を占めたのは、「配慮を必要とする子ども」に関するものであった。「配慮のある子どもには練習が難しい」(保育所)、「配

役など個々に合わせてあてた場合に保護者がそれを理解しあたたかい目で見るとか」(幼稚園)などの記述からは、発表会という園行事の遂行と、配慮を必要とする子どもへの適切な保育との間で、板ばさみになっている保育者の姿が見て取れる。そのほか、「子どもたちのがんばりを保護者に上手く伝えることが難しい。(当日の姿も大切だが、その過程など)」(幼稚園)、「通常保育とのバランスが難しい」(保育所)、「行事が続く、幼児がゆっくり遊んだり楽しんだりする時間が減ってしまう」(幼稚園)などがあった。

保育所で「練習に多くの時間を取られる」をデメリットとして感じている保育者が多い要因は、今の時点では推測の域を出ない。しかし、前述の「その他」の自由記述にあった、「配慮の必要な子どもを中心とした子どもの負担を懸念」「通常保育とのバランス」などの内容を考え合わせると、可能性としては2点があげられるのではないかと。1点めは、保育が発表会の練習という活動に偏ることに対する疑問であり、2点めは繰り返し練習を行なうことが子どもの楽しみを阻害することへの懸念である。

### 3-2. 通常の保育における劇あそび

#### 3-2-1. 通常の保育の中における主活動としての劇あそびの有無と頻度

「年長クラスの通常の保育の中で、発表会の準備を想定せず、主活動として劇あそびを行なうかどうか」を質問したところ、Fig. 10にみるように、保育所では半数程度、幼稚園では8割以上が行なっているという結果が出た。

#### 3-2-2. 劇あそびの頻度

##### ①通常保育で「行なっている」園

前項の質問で通常の保育の中で劇あそびを「行なう」と答えた回答者に対して、行なう頻度を質問した。「2,3ヶ月に1回」「半年に1回」「1年に1回」「無回答」が、「1ヶ月に1回」「月に2,3回」「週に1回」「週に2,3回」を合わせた数をはるかに上回っている。すなわち、月一回以上劇あそびを行なっている園よりも、2,3か月に1回以下の頻度で行なっている園のほうが多い (Fig. 11 参照)。

##### ②通常保育で「行なっていない」園

さらに、通常の保育の中で劇あそびを「行なっていない」と答えた回答者それぞれの、「発表会の劇の導入期間」を調べてみると、Fig. 12のようになった。

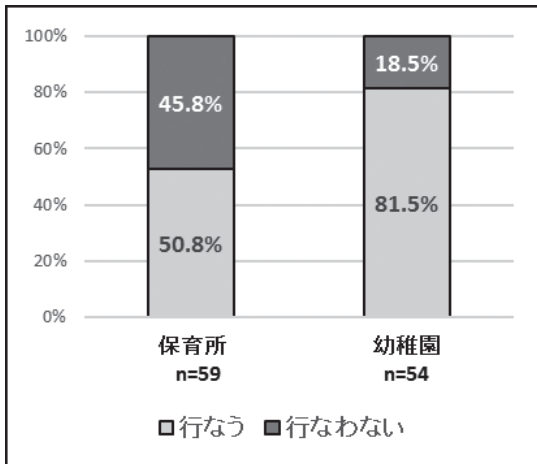


Fig. 10 Presence or absence of drama activities as the main activity in daily programs

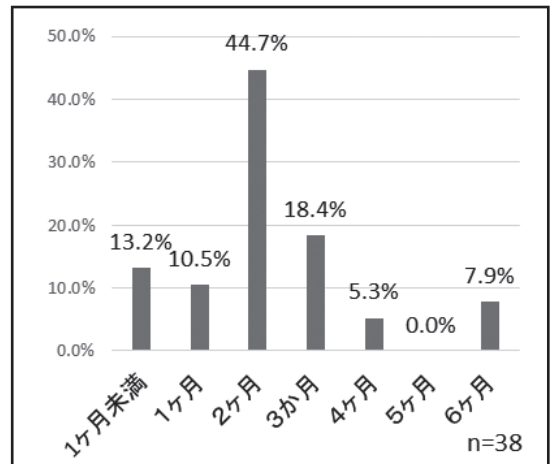


Fig. 12 "Periods for introducing drama activities" of the "Absence of drama activities as the main activity in daily programs" group

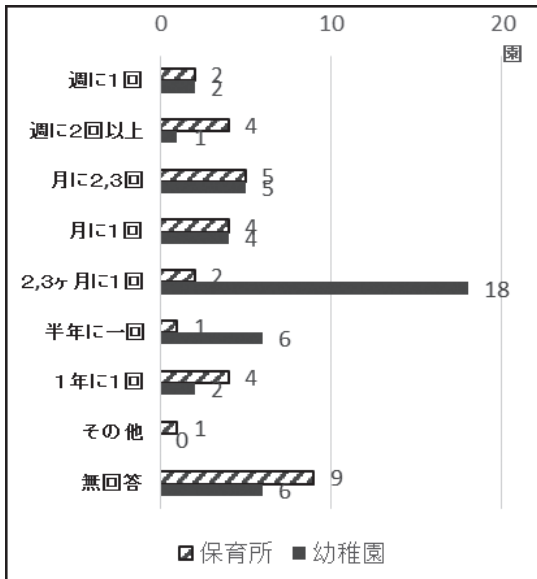


Fig. 11 Frequency of drama activities as the main activity in daily programs

通常の保育の中で劇あそびを行っていないと回答した園のうち、導入期間が2ヶ月以下の園は、合計して68.4%、即ち7割弱である。これらの園では発表会の導入期間と準備期間における練習以外の活動を合わせて1年に2～3ヶ月程度劇あそびを行な

い、残る9～10ヶ月は劇あそびをしていないということになる。これは、筆者のアンケートの回答者全体からみると、21.1%にあたる。

上記のことから2割の園では、発表会前の2～3ヶ月のみ、主活動として劇あそびを行っており、残る9,10ヶ月は、ごっこあそびや劇あそびは、自由遊びの中で自然に生起するのを待つ、という状態にとどまることが分かった。

### ③通常保育で「行なっている」頻度が少ない園

また、「通常保育における劇あそびの頻度が2,3か月に1回以下」「(不定期)と「無回答」も合計した)で、かつ「劇の発表会の導入期間が1ヶ月以下の園」を集計してみると、幼稚園では32園、保育所では3園、合わせて35園が該当した。これは筆者のアンケート調査の回答者全体の28.9%にあたる。注目すべき点は、通常の保育で劇あそびを行っていると答えた幼稚園44園のうち、72.7%にあたる32園が、この群に該当したことである (Fig. 13)。

この群は通常の保育で劇あそびを2,3か月に1回以下で行なっているものの、導入期間が1ヶ月以下と短いので、1年を通していても劇あそびの機会が少ないと考えられる。通常の保育で劇あそびを行なうと回答した幼稚園の保育者は保育所のそれよりも高い率であるが、その7割は、劇あそびに親しむ機会が十分ではない状況にある。

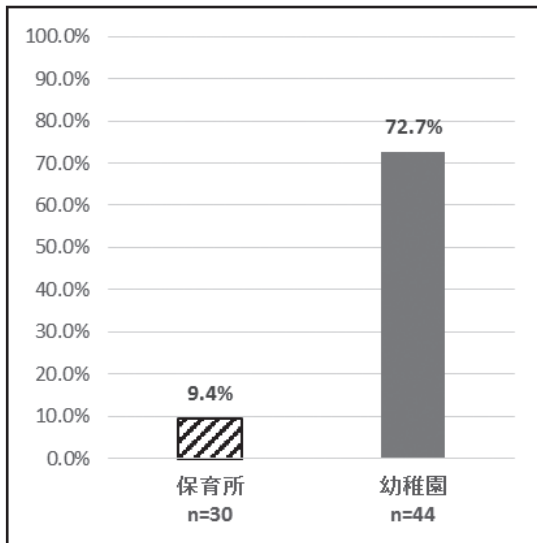


Fig. 13 The ratio of the “low frequency of drama activities” and “short periods for introducing drama plays” group to “presence of drama activities as the main activity in daily programs” group

前述の「通常の保育で劇あそびを行わず、かつ導入期間が2か月以下の園」(全体の21.1%)と、「通常の保育で2、3か月に1度以下の頻度で劇あそびを行なっているが、導入期間が1ヶ月以下の園」(全体の28.9%)を合わせると全体の50.0%を占める。半数の園では、発表会の導入としてであれ、通常の保育であれ、1年のうちごく限られた期間、回数しか活動に親しんでいないことが分かる。

#### 4. 結 論

現在、集団保育の劇あそびが抱える問題点は次のように考えられる。①発表会を前提とした劇あそびは、創造性につながる内容よりも練習に重点が置かれており、子どもに負担を与えていると感じている保育者も多い。②劇あそびの発表会の目的が、劇あそび本来のねらいである創造性よりも、集団の力の伸長におかれている。③通常の保育における劇あそびの頻度が少なく、回答者の約半数の園では、発表会前の2ヶ月しか劇あそびを行っていない。

③は①の結果として起こっているとも考えられ

る。発表会を前提とした劇あそびを年間の劇あそびの中心におく限り、練習が必要となり、その結果として、創造性を育む自由な劇あそびの期間を十分に取ることは現実的に不可能となってくるからである。

発表会での上演に関して、練習が必要となる理由は、「上演」の持つ特質によるものである。劇の上演とは一回限りの、そして一度始まったら止まらずに進行する流れである。決まった流れが必要なので、演じる側が大人であろうと、子どもであろうと、必ず一定の練習が必要となる。演じ手が子どもであることを考えると、本番前の1ヶ月～2ヶ月の期間、頻繁に練習する必要が生じてくる。園にもよるだろうが、領域「表現」の多種多様な活動内容の中で、年間における劇あそびの機会はある程度限られたものと考えられる。多くの園で、その限られた年間の劇あそびの活動の機会を、この本番前の「練習」でほとんど使い果たしてしまっているのではないか。

また、②も①に関連する問題である。「練習」が子どもの心に育むものは、創造性ではなく、克己心や集団で目的を遂げるといった力であると考えられる。つまり、①が変わらない限り、②の問題も続くと思われる。

つまり、三つの問題点は、発表会を前提とした劇あそびが、年間の劇あそびの中心をなしている、という点と、強く結びついていると考えられる。このことから、劇の発表会前の2、3ヶ月間、練習中心の劇あそびの活動を行なう、という今のスタイルから、通常保育の中での劇あそびを年間を通して行ない、その分、劇の発表会の練習に費やす時間を減らす、というスタイルにシフトすれば、問題の大半は解決されることが予想される。

通常保育の中で、劇あそびを主活動として行なわなくとも、自由あそびの中で、子ども自らがごっこあそびや劇あそびをしていればよいではないか、という意見もある。しかし、北村(2001)の調査によれば、日常保育の中での劇ごっこの有無について、「自然発生的にやりだす」と答えた保育者は55%であり、「保育者が意図的に仕向け」て行なうものが31%、「していない」が14%であった<sup>9)</sup>。このことから、「5歳児ですらごっこ遊びをしない」という明神の指摘<sup>10)</sup>を現実として受け止め、日常保育の主活動においても劇あそびを継続的行なう必要があると考える。

## 〔要 約〕

集団保育における劇あそびに関して、東京 23 区 効率保育所・幼稚園・こども園の 5 歳児クラス担任 へのアンケートを行い、現状と保育者の意識を調査 した。その結果、劇あそびは発表会での上演を前提 とした活動として行なわれているため、一年の限ら れた期間に、練習に重きをおいた内容で行なわれて いることが分かった。保育所保育指針や幼稚園教育 要領に示されたねらいのとおり、劇あそびが創造性 に寄与するものとなるためには、劇あそびが練習を 中心とした内容ではなく、過程中心の即興性のある 内容で行なわれる必要がある。現在、自由あそびの 中でのごっこあそびが減少していると言われてい る。一年を通し、日常の保育の中で、発表会を前提 としない自由な劇あそびを主活動で取り入れていく ことを、保育者は検討していくべきである。

## 付 記

本稿は、2016 年 5 月 20 日・21 日に行なわれた保 育学会第 70 回大会での口頭発表に加筆修正したも のである。

## 謝 辞

アンケートにご協力いただいた保育士・幼稚園教 諭の方々に心から感謝します。

## 引用文献

- 1) 厚生労働省 保育所保育指針＜平成 29 年告示＞ フレーベル館, 21 (2017)
- 2) 文部科学省 幼稚園教育要領＜平成 29 年告示＞ フレーベル館, 20 (2017)
- 3) 前田博：創造性を育てる教育 明治図書, 31 (1968)
- 4) 恩田明：創造性教育の展開 恒星社厚生閣, 3 (1994)
- 5) アレン・オーエンズ, ナオミ・グリーン, 小林 由利子編：やってみようアプライドドラマ 図 書文化, 12 (2010)
- 6) 北村恵子：幼児教育における表現活動について 保育現場への実態調査をもとにして 上田女 子短期大学紀要, 21 号, 57-72 (1998)
- 7) 前掲 6)
- 8) 前掲 6)
- 9) 前掲 6)
- 10) 明神もと子：幼児のごっこあそびの想像力につ いて 北海道教育大学釧路校研究紀要, 37 号, 143-150 (2005)